

音楽分野における大学評価のあり方

— 英米の取り組みから学ぶこと —

渡 辺 健 二、中 村 美 亜

序

平成9年の行政改革会議最終報告以来、国立大学の法人化（平成16年4月実施）を含む大学改革の議論の中で、平成12年の自由民主党「提言 これからの国立大学のあり方について」や同党政務調査会による「研究評価の改革への提言—世界水準の質の高い研究成果を生み出すために—」等、大学評価に関する関心が非常に高まった。これは、日本経済の危機的状況に伴い、高等教育の社会貢献度についての関心が急速に高まった事を表すとも言える。

日本における大学評価は、古くは大学基準協会による評価、平成3年の大学設置基準の大綱化における自己点検・自己評価及びその公表の義務化、又、近年は大学評価・学位授与機構による試行的評価等によって既に行われてきているところであるが、平成14年度中教審答申「大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について」を受け、平成14年、学校教育法において全ての大学に自己点検・自己評価のみならず文部科学省の認める認証評価機関による大学評価が義務づけられ、平成16年度から開始されたのは記憶に新しい。これをもって大学は7年以内に一度は第三者による評価を受けなければならなくなった。

国立大学として本学が今まで関わってきた、大学評価・学位授与機構による各種試行的評価において最も問題になったのは、1) 評価システムが主に理工系の研究センター型大学を基準として作られたものであり、本学の活動を評価するに当たって不適当な点が見られたこと、2) 大学というシステムでありながら、個人としての芸術活動を促進するため、最大限の自由度を教員に対して確保する重要性を評価側に認識させることの2点であった。

2)については、本学が非常に規模の小さな大学であり、特にシステム上精緻に整備されなくとも十分に機能していくという特殊事情があり、その説明で事足りるにせよ、1)については、大学評価・学位授与機構のヒアリングの際、機構側の示す芸術評価の基準が不備と主張するのであれば、評価基準は機構側ではなく、芸大側から提示されなければならないという指摘を常に受けてきた。

本学では、これを受け、大学法人化に際し、芸術分野の評価について積極的にコミットすることが避けられないと判断し、中期計画に「芸術分野（美術・音楽）における評価・分析

方法について調査検討し、評価基準の試案を策定する」という項目を盛り込んだ。

これについて、平成16年度学長発信プロジェクト「芸術分野の評価の在り方、評価方法に関する研究」として企画評価室員渡辺が中村と共に、予備調査として音楽分野におけるイギリス及びアメリカの評価事情についてWebを通じた調査を行った。本論文は、その報告である。尚、各章の担当は章末尾に記載した。

(渡辺)

1. 評価とは (概念的考察)

大学評価が叫ばれるようになってきたのは、一つには大学の閉鎖性に対する批判もあるが、根底には、先にも述べたように、日本の経済状況悪化による経済界からの大学への期待、裏返せば社会の構成員としての応分の負担への要求があると思われる。平成3年の大学設置基準大綱化の際、大学の目的及び社会的使命を達成するため、教育研究等の状況を自己点検・自己評価を通して明確化することが義務づけられたのはその第一歩とも言える。

大学も社会の一員である以上、大学の活動や社会貢献等について説明する必要があるのは自明の理である。しかし、大学の評価とは、第一に大学の活動とその結果を分析し大学の改善に役立てられるものでなければならない。その結果として、学外への説明責任を果たすものともなるし、学内に対しては大学の発展に寄与するものともなろう。

即ち、評価は「活動の分析→自己認識及び問題点把握→改善・発展」というプロセスに沿って行われるものであり、評価目的は一義的には大学の改善、二義的には説明責任遂行、評価による受益者は一義的(狭義)には大学、二義的(広義)には社会であると考えられる。

日本における大学評価も概ねその概念を基礎として行われていると思われるが、参考として、イギリス及びアメリカでの評価について、Webを中心とした調査の結果を次に述べる。

(渡辺)

2. イギリスにおける評価

イギリスにおける、音楽分野での大学評価基準は、RAEと呼ばれる研究業績評価と、QAAという機関が行う教育の質に対する評価の二つが主なものである。

2.1. RAE

RAEは、Research Assessment Exercise (研究評価活動)の略で、あらゆる分野の研究に対して行われる全国一律のレーティング・システムである¹⁾。大学の各学部は、イギリス政府直属の評価委員会(多くは大学教員で一部は産業界より選出)によって1、2、3b、3a、4、5、5*(低い方から)の評価がつけられ、その結果は公開される。評価は、ほぼ4～5

年おきに行われ、毎年10億ポンド以上の研究補助予算（特定プロジェクトを対象とする「特別経費」を除く）が、RAEの結果に従って、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの各大学に配分されている。

RAEは、1986年、政府により選別的助成制度（つまり、予算を一律に配分するのではなく、費用対効果の高い大学に多くを配分しようとするシステム）が導入された時に始まった。優れた研究を行っている大学に、多くの予算配分を行うことで、イギリスの実績ある研究機関が十分な研究活動ができるよう保証しようというのがRAEのねらいである。この制度の導入によって、各大学は予算を確保するために、それまで以上に研究活動に熱心に取り組むようになり、その結果、すぐれた業績が生み出されるようになったと、RAE実施側は評価している。

以上をまとめるならば、RAEは、1)政府主導の評価であるという点、2)予算配分の決定を目的にしている点、3)全国一律のレーティング・システムを設けている点、4)あくまで研究業績の評価である（教育などの評価ではない）という点が特徴であるといえよう。

2.2. 音楽分野におけるRAEの基準

音楽分野における評価基準と方法 (RAE 5/99) の主要部分は、付録1の通りである。ここで規定される音楽分野の範囲は、「作曲と演奏（クラシカル、コマーシャル、ポピュラー）、音楽史と音楽批評、民族音楽学、理論と分析（認知的アプローチを含む）、テクノロジーとコンピュータの応用」(3.58.1)であり、その評価にあたっては、「学問的研究に加えて実践ベースの研究があること」(3.58.2)を認識するべきだと述べられている。

では、実践ベースの研究とはどういうものだろうか。3.58.12には、どういう演奏が研究業績になるかが書かれている。ここで注目すべきは、研究業績として演奏が評価されるためには、その演奏が、「解釈、歴史的演奏実践、技術的革新といった点において、新たな試みを行い、我々の知や洞察を深めることに貢献したと見なされ」なければならないことである。演奏会の回数や、漠然と質の高さをめざした演奏は、評価の対象とはならない。評価を受けるためには、その演奏に「研究活動としての意義」が必要なのである。

しかし、実際になされる演奏会のほとんどは、「新たな試み」を何らかの形で行っているもので、その点をアピールすることができれば、この基準を満たすことはさほど困難でないとも考えられる。その場合、重要になるのは、その演奏における新しさをどう定義するかということであろう。つまり、どういった点でその演奏に意義があるかを、歴史・社会・美学的な観点から、言語で表現することが演奏家にも要求されるということである。これは演奏家にとって一見厄介なことと思われるかもしれないが、言語化された明確な目標が演奏に先立って設定さえされていれば、演奏家がその演奏を「研究業績」としてアピールすることができるのであり、必ずしも演奏家に大きな負担を課すものではないとも考えられる。

RAEは、点数によるレーティング・システムを採用している。これは、審査基準や結果が誰にでもわかりやすく表現されるという利点がある反面、単純化された方法には、いくつもの弊害がある。例えば、政府の評価委員に高く評価されるためには、研究業績を数多く作ることが要求されるが、このことは、大学が質の高い研究をおこなっていくこととは必ずしも呼応しない。もちろん、RAEは数だけでなく、研究の質や将来性についても評価を行うと言及してはいるものの、そういった内容や将来性に対する評価方法はまだ十分に確立されているとは言い難い。

実際、イギリスのマンチェスター大学に留学したことがある日本人は、大学がこのレーティングで一喜一憂している反面、レーティングの結果が、大学教育や研究の充実とはあまり関係のないものであったと証言している。マンチェスター大学では、以前「3」だったRAEのポイントが、「5*」になったが、大学に在籍する大学院生が、この変化を実感することはなかったと言うのである。

さらに、全国一律の基準ということは、大学が新しいタイプの独創的な研究を行おうとする場合、他大学と違った特色を打ち出そうとする場合、十分な評価を得ることができないという難点がある。こういった問題点をクリアしようとしたシステムが、後述するアメリカのアクセディテーション制度といえよう。

2.3. QAA

イギリスにおける教育評価は、主に、The Quality Assurance Agency for Higher Education (高等教育における水準確保をはかるための機関)において行われている¹¹⁾。この機関は、各大学から集められた資金をもとに運営されている独立組織であり、1997年に設立された。

QAAの評価目的は、大学で授与される学位の水準や、教育の質の高さを確保することであり、高等教育におけるさらなる質の向上を奨励することである。QAAは、理念として、学位授与のために必要な学生水準は、全国ほぼ一律であると考えた。したがって、各大学が学位授与に至るまでに必要な教育や支援を学生に行っているか、共通の指標でシステム面からチェックすることが重要な課題となる。QAAの評価は、ピア・レビューによっておこなわれる。

QAAには、音楽分野における基準も詳しく定められているが、理念的なことがらが多く、具体性には乏しい¹²⁾。特徴的なのは、総合大学の中での音楽学部をどう位置づけるかということに多くの議論が費やされていることである。「音楽は、創造力や演奏の技術を育むと同時に、歴史、社会学、美学、分析力といった人文教育を行うものである」(2.0.1)という立場から、音楽を包括的に教育していこうという姿勢が見て取れる。入学の際に、実技試験を課すところもあるが、課さないところも多いという記述があることから明らかのように、ここで評価の対象となっているのは、日本における旧来の音楽大学ばかりではない。演奏家や作曲家を

育てるだけでなく、音楽学、音楽教育、音楽ビジネス、マネジメント、その他の新しい分野で活躍する人材を視野に入れた音楽学部のあり方を目指しているのである。

QAAの基準は、次にとりあげるアクレディテーション制度とは異なり、周期的な評価による大学の改善を主たる目的とはしていない。新しい大学・学部に対して、学校作りの指針を与えるというのがその第一目的であり、そこには、理念的なレベルで、QAAが描く音楽学部の理想型が描かれている。その反面、評価基準としては具体性に欠け、大学評価基準のモデルとしては不足の感がある。

(中村)

3. アメリカにおける評価

3.1. アクレディテーション (Accreditation)

アメリカにおける大学評価は、音楽分野に限らずどの分野でも、アクレディテーションというシステムによって行われている^{iv}。アクレディテーションの精神は、大学評価を政府や外部に委ねるのではなく、大学団体が自分自身の責任として行うことにある。実際には、約100ページほどの自己評価レポートを各大学が作成し、それを基にピア・レビューアーが監査するという方法をとっている。

このアクレディテーション方式のもう一つの特徴は、大学に対する評価基準を、外部にある客観的な尺度によって行うのではなく、ミッション・ドリブン (mission-driven)、すなわち、各大学が持っている建学の精神や目的に沿って、大学運営がされているかどうかをチェックするということである。このシステムは、大学の自主性を尊重するものであり、また、自主性をさらに支援するという効果ももっている。これは、イギリスにおけるRAEなどの外部による客観的基準にもとづく評価では達成しえない効果である。

ニューイングランド基準協会、高等教育機関部門のエグゼクティブ・ディレクターであるチャールズ・クックは、アクレディテーションにおいて基本となる評価は、次の11項目であると述べている^v。

- 1) 大学が掲げる建学の精神と目的は何か？
- 2) 大学はその計画に従って、どういう年次計画を作り、それをどのように運営しているか？
- 3) そのためにどのような組織をつくり、運営しているか？
- 4) 具体的にどのようなプログラムをもっているか？
- 5) それを支える教員の資質はどうか？
- 6) 図書館やその他のリソース施設は充実しているか？

- 7) どのような学生へのサービスが行われているか？
- 8) 大学の設備は十分に機能しているか？
- 9) それを支える資金はどのように運営されているか？
- 10) 大学内の活動が、外部に公開されているか？
- 11) 倫理的に健全であるか？

アクセディテーションでは、こうした基本項目に従って、まず自己評価を行い、それをピアからなる調査委員会が監査する。その場合、重要視されるのは、その大学が適切に建学の精神や目的に沿って運営されているかをチェックすると同時に、その大学がさらに発展していく可能性をもっているかを調査することである。委員会には、重箱の隅をつつくような否定的な批判でなく、大学が発展するために有益で建設的な提案をすることが要求される。

自己規制については、安易な方向へと流されるのではないかという疑問が投げかけられることもあるが、「大学が自らを律し、改善に努めようとしないう限り、決してよくなることはない」と、クックは述べている。

3.2. 音楽分野におけるアクセディテーション

アメリカにおいて、音楽分野におけるアクセディテーションを推進しているのが、NASM、すなわちNational Association of Schools of Music（アメリカ音楽大学協会）である^{vi}。NASMは、自身がおこなっているアクセディテーションを次のように説明している。

アクセディテーションとは、非政府組織による大学評価システムである。これは、各大学やプログラムが、各自の教育目標を達成しているか、また、当協会が定める基準に合っているかを、ピアによって周期的に行われる評価プロセスである。基準は、教育の質に根本的に関わる運営面、カリキュラム面でのことがらについて言及している。認可委託機関によって認可を受けたということは、その大学が、当協会の定める規定や基準、ガイドラインの条件を満たしているということを表している。この自発的なプロセス、つまり、規則にのっとった自己評価とピア評価は、現在も継続して行われている。アクセディテーションとは、現実的な意味では、承認（アブルーバル）を得るということである。つまり、ある大学のプログラムが、その大学が委ね、信頼する外部機関によって評価を受けた結果、その基準を満たしていたということを証明することである。この認可制度は、大学間での単位の互換を可能にすることもあるだろう。いずれにせよ、この認可制度が、高い教育水準を維持し、健全な大学運営を行う基盤を提供しているということは確かである。

また、NASMは、イギリスのRAEが行っているような大学のランキングには、次のように批判的な見解を示している。

協会は、認可された大学のリストを公表しているが、他の団体と違い、大学やプログラムのランキングを行っていない。ランキングは、いろいろ役に立つことも多い。しかし、ランキングは、ふつう、大学の過去の業績に関する主観的な判断に基づいているのであり、総合的見地からの質的な内容に関する詳細なレビューに基づいているのではないことを理解すべきである。ランキングの結果を見る時は、いったい誰が、何を、誰によって、何のために行っているかに注意を払う必要がある。さらに、各大学によって、目的や優先課題は千差万別である。さまざまな大学やプログラムを一括してランキングするのは、りんごとみかんを比べるのと同じだろう。あるランキングで最上位に評価されている大学でも、ある学生にとって最適であるかどうかはわからない。

NASMが示す学部プログラムの評価基準の概要は、付録2に示す通りである。付録2から明らかなのは、すべての基準項目がすべて、大学のミッションとの関係において位置づけられていることである。個々の授業内容から、教員の採用や入試の細目に至るまで、また、図書館などの図書購入計画から、事務の運営に至るまで、あらゆることが大学のミッションを達成するために効率よく運営されているかが、評価の最大関心事となっている。

さらに重要な点は、アメリカでは多様性が重視され、各大学が独自色を打ち出すことを強く求められている点である。国全体を通して、ある程度妥当性のある基準を作りだそうというイギリスの方針とは対照的に、アメリカは、そうした基準は、むしろ大学間の競争力を弱めてしまうと考える。あくまで、重要なのは、個々の大学がユニークな建学の精神を打ち出し、その精神と目的に見合う大学運営ができているかということなのである。

となれば、当然、この建学の精神と目的が何であるかということが最重要となってくる。これが明確に定義されなければ、何も評価をくだすことができない。もし日本の音楽大学が、アメリカ流のアクレディテーションを応用するとなると、建学の精神と目的をどう定めるかが、一番の問題となるだろう。というのは、日本の音楽大学では、これまでそういう問題設定を行ったことがほとんどなかったからである。しかし、音楽大学が、音楽家を養成する専門学校とは違い、「大学」なのだとしたら、やはり、そこには、明確な建学の精神と目的が定められる必要があるのではないだろうか。

さらに、興味深いのは、NASMが、音楽分野における「才能」「教育」「就労」の関係について、明確な考え方を示していることである(付録3)。才能はどのような教育によって開花されるのか、芸術分野での教育の役割は何か、そして、音楽大学での教育は後の就職やライフ・プランとどのようにつながっていくかということに関しても、NASMは明瞭な意思表示

をおこなっている。確かに、なぜ音楽大学で勉強をするのか、音楽大学を出たら何をするのか、ということは学生自身が考えることである。しかし、「音楽」の意味が拡大し、多様な価値観をもつ学生がますます増えつつある現在、大学が学生に、そこがどんなサービスを提供するところなのかを明確に示すことは、今後ますます重要になってくると思われる。

アクレディテーションは、ミッション・ドリブンの大学評価システムである。この制度は、評価というものが、単に現状の評価にとどまらず、大学の将来のあり方を決定していく重要な鍵となることを強く意識したものである。音楽分野におけるアクレディテーションを推進するNASMは、システム運用の精度や効果を上げるために、その評価の方法をつねに更新しているが、それと同時に、音楽大学が、社会でどのような役割を担うのかということについても積極的に発言を行い、将来の音楽大学のあり方についての提言を行っている。社会との関係を積極的にさぐり、その将来を展望すること、そして、それに沿った理想の大学をつくっていくために、必要な評価システムを整備していく、といった息の長いアメリカの取り組みは、大学の存続自体が重要課題となりつつある日本において、大いに参考にすべきモデルなのかもしれない。

(中村)

4. 音楽分野における日本での大学評価への課題

日本における大学評価は、アメリカ型のアクレディテーションによる評価と、イギリス型の既定の基準による評価とその結果による財政支出のコントロールのどちらにも偏ることなく、適宜両者の特徴を組み合わせた形で行われている。(アメリカにおいて大学評価が政府と無関係の機関によって行われることが可能なのは、州立大学成立の経緯や寄付金制度などにより、大学がしっかりとした財政基盤を持つことが比較的容易であることが要因の一つであろう。)

例えば、国立大学法人における中期目標・計画とその達成度評価はイベント・ドリブンという点で正にアクレディテーション型である。但し、その評価が運営費交付金に影響するという点ではイギリス型である。大学評価・学位授与機構による評価は、あらかじめ評価基準を設定しているとはいえ、その基準は、大学が定めた大学の目的・理念を評価の根本におくという点で、アクレディテーションの精神を主体としている。又、大学基準協会の設定している基準には、アクレディテーションにおける11の基本項目の影響が色濃く見られる。

しかし、大学評価がアクレディテーションを主体として行われているとはいえ、個々の事例に対しての評価、例えば、教員の資質、教育の成果などについての評価にはある種の評価基準を求めざるを得ないことがしばしば起こる。例えば、高い水準、多大な成果と自己評価する場合、何をもって高い水準、多大な成果と言うかについての基準が明確化されている必

要があろう。即ち、大学が自ら立てた目的がどの様に遂行されているかを検証する際の個々の事例について、芸術分野の特殊性を考慮した基準が必要と言うことである。現在の大学評価においては、こうした基準は規定されておらず、どこか既成概念による評価基準を想定している様にも見え、以下のような点を含む多くの未解決の問題を残している。

- ・芸術の最も大きな成果である「心」「感動」をどの様に評価するか。
- ・一般の大学、特に理工系大学と違い、実技系教員の活動の場は学内ではなく学外が主体であり、大学との関係が明確ではない。
- ・活動そのものの成果・効果についても明確にし難い。
- ・演奏活動が一般の研究活動と同様な観点から評価される。或いは、全く評価されない、即ち評価の観点に上ってこない可能性がある。
- ・教育についても、個人レッスン主体の実技教育は統計的データを取る母体となる教員当たりの学生数が著しく少ない。又、教育成果は学生個々の感性・資質によるところが非常に大きく、平均値を出すことは無意味に近い。 等々

芸術においては、個人個人の活動内容は個人の感性に負うところが極めて大きい。感性は人それぞれ多様であるため、個別の評価は評価者によって大きく分かれる。つまり、芸術分野においては、視点・観点が個別的になればなるほど評価は不可能に近づく。従って、まずは、個々の芸術行為そのものに注目するのではなく、大学としての、つまり芸術活動を総合的に捉えたものに対して評価することを基礎におくべきである。又、その際、一つの観点からの基準ではなく、複数の観点からの基準を用いて、そのどれかを満たす場合は評価とすることも必要である。

一例を挙げれば、演奏会活動については活動総数、地域的広がり、社会的評価（批評）等をそれぞれ考慮することにより、活動件数は少ないが評価が高い、活動件数も多く地域的広がりも国際的であるなど、多面的な評価が可能と思われる。教育活動においても、学生と関わっている総時間数、学生による満足度評価、受持学生の活動等を単独、或いは組み合わせる事によって多面的な評価が可能であろう。

今回の音楽分野評価に関する予備調査を通して、イギリス型の既定の評価基準による評価ではなく、アメリカ型のア krediteーションによる評価が芸術分野にとっては望ましく、日本で現在行われている大学評価との整合性も高いことは確認できた。次のステップとして、既に行われている大学評価において、個別の項目・観点における評価基準を芸術分野特有の事例に合わせて如何に考えるかが重要であり、本学を中心とした音楽系大学によるワークショップ、シンポジウムを通して、適切な評価基準の指標を策定していく活動が必要と考えられる。

(渡辺)

以下は、イギリスのRAE、アメリカのNASMそれぞれの評価基準、観点の抜粋である。

付録1 RAEにおける音楽分野の評価 (RAE 3.58音楽、ユニット67)^{vii}

○要約

3.58.1 本項は、作曲と演奏(クラシカル、コマーシャル、ポピュラー)、音楽史と音楽批評、民族音楽学、理論と分析(認知的アプローチを含む)、テクノロジーとコンピュータの応用について言及する。

○研究の範囲と学際性

3.58.2 評価委員会は、音楽分野においては、学問的研究に加えて実践ベースの研究があることを理解している。

3.58.3 評価委員会は、分野横断的な研究など必要と思われる場合は、他分野の評価委員や専門家によるアドバイザーに相談を請う。ただし、最終レイティングは、これらの判断に基づきながら、音楽評価委員会によって行う。小委員会の招集は行わない。

○共同申し込み

3.58.4 他大学との共同で申し込みがなされた場合は、大学ごとではなく、申し込みごとに評価を下す。

○評価の対象となるもの

3.58.5 評価は、RA2 (3.58.10~3.58.12) に記された項目にしたがって行われ、関連する研究環境と研究の方向性ととも評価される。外部の研究助成や奨学制度のような(外から内向きの)尺度も、研究環境の一部として評価されるが、評価委員の主たる関心は、あくまで、(内から外へ向けての)研究業績である。評価は、量的尺度をとるが、現在進行中の研究(カテゴリーC)の数も考慮に含まれる。(略)

3.58.6 学部の大きさは、研究水準を示すものとは見なされない。また、広い領域にわたる研究が、特定分野に限定された研究よりも優れている、あるいは劣っていると見なされることもない。

○実践形式の研究

3.58.7 評価委員会は、実践形式の研究も重要と考える。RAEでは、実践的な活動も、オリジナルな研究として示された場合は、他の研究と同様な評価基準によって評価を下す。

3.58.8 実践形式の研究として提出されるものは、RA2に示されたカテゴリーの各項目に対して300語以内で必要十分な説明を加えること。(実践形式の研究については、下の3.58.12b~eを参照。)これらの説明において、実践がどのようにRAEの定める研究として成り立っているか明らかにされるべきである。また、目標、方法、手続き、革新性、意義、背景などは、

必要に応じて明確にされたい。研究としての価値が自明な場合は、説明を添付する必要はない。

3.58.9 実践業績が複数の方法で示される場合（例えば、曲の楽譜、録音、演奏など）は、RA2に従い、主要な業績を示せばよい。1994年以前から継続して行われているものに関しては、改訂等が含まれない限り、現在の業績とは見なされない。

○ 研究業績（RA2）

3.58.10 音楽における研究業績には、実演、放送、録音、映画、ビデオ、コンピュータ、楽譜などの出版物が含まれる。実演などの場合は、そうした催しものが、一般の人たちに享受可能であったこと（公に案内がなされたなど）を示すものが必要である。電子出版物（インターネットでの出版）は、一般出版物と同じ扱いがなされるが、RA2に示された方法で、URLが明確にされなければならない。

3.58.11 すべての業績は、以下のようなRAEの定める方法（つまり、一般的な研究を定義する方法）で示されなければならない——方法・解釈・視点における独創性や新奇性、厳密さ、想像性、規模、実体、意義、国内・国外への影響力。提出された資料が示す水準を知るために、必要に応じて、評価委員会は、出版物や研究業績がどのようなものか考慮に入れる。例えば、厳格な査読や審査は行われているかということ。ただし、そうした審査を経ない研究業績が劣っていると自動的に判断することはないだろう。委員会は、音楽業界や大衆のサポートを受けにくい分野があることを重々承知しているので、そうした判断基準を参考にする際には、細心の注意を払うように心がけている。

3.58.12 以下のような研究を業績として認める（ただし、これらはあくまで指標であり、網羅的に示しているわけではない）。

a. 文字による出版：（略）

b. 楽譜の校訂：（略）

c. 作曲：（略）

d. 演奏：（略）

e. コンピュータ：（略）

○リサーチ・アシスタント（RA3）

（略）

○外部からの研究資金（RA4）

（略）

○RA5

（以下略）

付録2 NASMの学部プログラムに関する評価基準

(The Assessment of Undergraduate Programs in Music^{viii}より)

序文

本書は、音楽における学部プログラムを、以下の観点から評価しようとする機関や個人を支援する目標で作られている。

- 1) 現行プログラムの改善を計画する
- 2) 現行プログラムの妥当性を調査する
- 3) 新しいプログラムの必要性を検討する
- 4) 新しいプログラムを計画する

また、本書は、学部における音楽教育を、アメリカの大学教育という巨視的な視野から築いていこうとする人たちのためにも書かれている。

本書の内容は、NASMの認可基準と深く関わっているが、それらを表したものではない。学部における学部教育のクオリティー向上のためになされてきたこれまでの歴史的成果をまとめた資料である。

イントロダクション

アメリカにおける音楽学部での音楽家養成教育は、これまでにはかり知れないほどの文化的利益をもたらしてきた。何十年もの間に、何千もの学生たちの才能が開花し、能力が培われてきた。これらの人々は、アメリカの重要な文化的人材として活躍してきた。

しかし、近年、これまでの学部教育のあり方に疑問が投げかけられている。学部教育の使命、内容、資金に関しては、以前からよく言及されてきたが、それ以外でも、文化自体の変容、教育についての公的理解、教育水準のなおいっそうの向上などが、新たな問題となってきた。したがって、規模やレベル、評判に関わらず、どんな学部プログラムも、深刻で難解な問題に今後直面すると考えられる。

アメリカの大学教育では、ゴール達成のためにさまざまなアプローチをとる。NASMもこうしたあり方にならって、本書を製作した。つまり、本書は、学部教育の運用やゴール達成の方法に関する質問を列挙しているが、利用者が正解を探し出すことを期待しているわけではない。本書が掲げる自己評価のための質問には、さまざまな方法で答えを出す事ができるはずである。正しい答えというのは、個別の状況によって異なってくる。

また、本書は、各大学の多様なあり方をサポートしている。そこで、本書が主眼とするのは、各科プログラムのゴールを明確にし、それを達成するために、どう目標、リソース、科目を整備していったらよいかを考える手助けをすることである。

NASMの主要な役割は、音楽大学の認可を行うことである。認可に関する規定は、同連盟

発行の『ハンドブック』に収められている^{ix}。『ハンドブック』は隔年発行で、連盟の事務局を通じて購入することができる。NSAMは、(略)

包括的な評価がうまくいくかどうかは、どれだけ多くの教員や事務員など、音楽学部のプログラムづくりに関わっている人たちの協力を得ることができるかに関わっている。

本書を読むにあたって、NASMが掲げる学部教育の基準に精通していない方は、『ハンドブック』に書かれている関連項目を読まれることが望ましい。

第1部 計画や評価のコンテキスト

学部教育というのは、今後、音楽分野において重要な役割を担う各学生の芸術的・知的基礎を作る場を提供することである。学生の中には、プロの音楽家になる者もあれば、音楽を学んだことを生かして他の職業につく者もいる。全国的な規模で見た場合、音楽産業というのは、作曲、演奏、学問、教育、研究調査、セラピー、音楽ビジネスなど多種多様である。これらの広い範囲にわたる活動すべてを包括するようなプログラムをもつことができる大学機関というのは、非常に稀である。そうだとすれば、各機関がどのような具体的なゴールや目標をもつかということが、とても重要な問題となる。

(略)確かに、ゴールや目標は、リソースや規約、他のさまざまな環境づくりと密接な関係にあるため、一括して論じるのは困難かもしれない。しかし、どんな状況にでも応用しうる原則というものには存在する。以下は、そうした立場からの質問事項である。

A. 大学外

1. どんな国内的事情が、大学で専門の音楽教育を行うことと関係しているのだろうか？例えば、人口問題、経済状況、文化的関心など。
2. どんな地域事情が、大学での専門の音楽教育を行うことと関係しているのだろうか？例えば、近隣の他音楽大学との関係、地域の特別なニーズ、行政（財源）からの要請など。
3. どの程度、当該学部音楽プログラムは、上記の点 (A1, A2) について影響力を持ちうるのだろうか？どの程度、上記のような要素に拘束されるのだろうか？

B. 大学内

1. 学部プログラムについての大学全体のゴールや目標は何か？大学院プログラムとの関係は？
2. 大学の進路を決定していく機関は何か？
3. 当該大学は、大学全体の使命やゴールをどのくらい達成しているか？今後の方向性は？

C. 音楽ユニット（学部と大学院を合わせたもの）

1. 音楽ユニットとしてのゴールや目標は何か？学部、修士、博士は、どう違うのか？
2. 学部、修士、博士では、どの程度、同じゴールや目標を共有する必要があるのか？
3. 音楽ユニットは、全体の使命やゴールに関して、どの程度、一貫性を保ちうるのか？どうすれば、一貫性が保たれるのか？どういう状況が、この一貫性を阻害するのか？

D. 音楽学部プログラムの使命

1. 各科（例えば、ピアノとか、声楽とか）プログラムの使命は何か？例えば、当該プログラムやその卒業生は、音楽業界において、どんな役割を演じることが期待されているのか？
2. 上記の各科プログラムは、学部プログラム全体の使命とどう関係しているか？
3. こうした使命一覧は、プログラムでさまざまな決定を下す際、どの程度拠り所として機能しているか？例えば、1)カリキュラムの決定の際、2)新しいカリキュラムの追加を含む、長期的計画決定の際、3)入学試験や、教員採用、設備拡充などの決定の際。
4. 音楽ユニットは、学部プログラムの使命を決定するのに、どれほど自立性が与えられているのか？

E. 学部プログラムのゴールと目標

1. 学部プログラム全体のゴールや目標は、どのようにして今日のものに発展してきたのか？
2. 学部プログラムのゴールや目標は、どの程度、意志によって決定されたものなのか？とりあえず、つなぎ合わせただけのものか？学内のどの機関が、学部プログラムのゴールや目標を設定する責任があるのか？
3. ゴールや目標は、どの程度、日常の決定事項や、今後の計画を決定する際に、拠り所となっているのか？1)学部プログラム全体としてはどうか？2)各科プログラムとしてはどうか？例えば、(a)来たるべき人口増加を視野に入れながら、5つの専門領域において、全国でも有力なプログラムを維持する[ゴール]。そのために、強力な学生スカウトを行ったり、入学試験の改善を行ったりする[目標]。あるいは、(b)演奏部門における学部プログラムを改善する五か年計画を打ち立てる [ゴール]。そのために、チェロ、ピアノ、ビオラ、の専任教員をリクルートする [目標]。

F. カリキュラムにおけるゴールと目標

1. 各履修科目のゴールと目標は何か？
2. これらのゴールや目標は、1)学部の伝統的な人文科学教育、2)音楽の伝統的専門教育、

- 3) 実験的・革新的学部教育と、どう関係するのか？
3. 各履修科目のゴールや目標は、音楽教員、音楽学部学生、事務員とどう関係しているのか？
 4. 現在の状況を改善するためには、教員、学生、事務員は、どの程度、今以上に、カリキュラムの履行に携わらなければならないのか？これは、現行のゴールや目標とどう関係するのか？
 5. 各履修科目は、将来、文化産業を担っていく学生に、どの程度の準備をさせることができるのか？例えば、プログラムをどう編成するか、あるいは資金をどう調達し、コンサートをどう運用するかについての基本姿勢やノウハウ（地方／全国、専門領域／音楽一般、など）。

G. 使命、ゴール、目標の浸透

1. 1) 学部プログラム全体、2) 各科プログラムの使命、ゴール、目標についての共通理解は、教員、学生、事務員の間、どの程度浸透しているか？
2. 決められた使命、ゴール、目標をコミュニケーションする責任はどの程度あるのか？プログラム内で、また、大学全体で、こうした責任はどの程度果たしているのか？

H. 使命、ゴール、目標の評価

1. 学部プログラムに関する大掛かりな審査は、前回いつおこなったのか？その結果はどうだったのか？
2. 審査の必要性は、何に拠って生じたのか？こうした必然性を生み出す圧力によって描かれたゴールや目標は、学部プログラム全体、あるいは、個々のプログラムが掲げるゴールや目標と、どの程度、一致しているのか？
3. 音楽ユニットは、学部教育の使命、ゴール、目標を、他の部門とコミュニケーションするやり方を、効率的であると評価するか？
4. 現行の手続きや制度は、どの程度、監査されているか？大学内の規約に明記されているのか？大学外の機関によっているのか？行き当たりばったりなのか？監査するかどうかを決定するのは誰なのか？誰が監査全体の責任をもつのか？
5. 評価過程は、評価の規模や複雑さ、評価に必要なリソース、誰が評価するかといったことと、どの程度関係があるのか？
6. 音楽ユニットは、現時点で、学部履修の使命、ゴール、目標をどの程度遂行しているか？

第2部：リソース

リソースは、お金以上のもの、いや、お金で買えるもの以上のものを指す。学部プログラ

ムに関して言えば、リソースは、学部プログラムのゴールや目標を達成するために必要なものすべてを含む。必要なリソースがそろっていることは、当然重要であるが、それらが効果的に利用されているかという点も重要な点である。

A. 学部教育の芸術的・知的環境

学部教育では、知識や技術を身につけ、それらをどう応用するかについて、練習、調査、研究することが期待される。(略)

1. 1)大学内において、2)学部プログラム全体において、3)個々の学部プログラムにおいて、芸術的環境と知的環境は、お互いにどういう関係を持っているのか？
2. 音楽の学部学生の「コミュニティ」がどれほど機能しているか？このコミュニティは、芸術的・知的環境づくりにどういう影響を与えているか？
3. 音楽学部に芸術的・知的環境を築き、整備していくための機関はあるか？さまざまな大学内外の状況の変化に対応して、こうした芸術的・知的環境を変化、発展させていく評価システムは存在するか？
4. 音楽専門学生に必要な、芸術的環境と知的環境とは、どのようなものであるのか？

B. 大きさと規模

1. 各履修科目の規模の関係は、1)各科プログラム、2)音楽プログラム全体、3)大学全体のゴールや目標とどういう関係にあるのか？
2. 各履修科目の規模は、学部プログラムの芸術的・知的環境整備とどう関係してくるのか？
3. 大学は、各履修科目が適正に運用されているのか、どの程度把握している必要があるのか？例えば、1)適正な教員数と必要な設備が保たれているか、2)上級者のために適正なコースが整備されているか、3)上級レベルでのアンサンブルのコースは設置されているか？
4. プログラムの規模は、現在の学生や教員によって維持されるのが適正であるか？
5. 学部プログラムの規模は、大学全体から見た場合、適正であるか？例えば、コースワーク、セミナー、個別指導、上級者用コース、個別プロジェクトなどはどのくらい行われているか？これらは、学部の芸術的・知的環境を維持するのに必要な数なのか？これらは、各科の目標に呼応しているか？
6. 学部音楽プログラムの規模について、定期的に査定は行われているか？
特に、教員の補充に際して。また、カリキュラムと雇用数の関係はどうか？
7. 規模について言うならば、同じ地域の他の教育機関との連携をはかるという方向性もある。それについてはどうか？

C. 執行機関

執行機関とは、規約などを決定し、それらの遵守を管理する、という二つの役目を担っている。

1. 執行機関の構成は、学部プログラム運営とどう関わっているのか？
2. 執行機関の構成は、1)学部プログラムの芸術的・知的環境維持、2)プログラムの規模、3)基本的資金、とどういう関係にあるのか？

D. 運営機関

運営機関とは、執行機関によって決められた規約に基づき、個別の決定事項を司っている部署を表す。通常、運営機関と執行機関は、密接な関係にある。

1. 運営機関の構成は、学部音楽プログラムの運用とどのように関わっているか？学部教員は、運営機関とどう関わっているのか？運営機関は、他の学部の機関とどう関係しているのか？
2. 運営機関は、学部の芸術的・知的環境づくりとどう関わっているのか？
3. 運営機関とリソースの活用とは、どう関わっているのか？
4. 学部プログラムの運営機関には、カリキュラム、学生、教員に対して、どれほどの権威があたえられているのか？

E. 教員

1. 学部の音楽プログラムを任される教員には、どんな資質が必要なのか？
2. 教員の業績は、学部の規模、ゴール、目標とどの程度関連する必要があるのか？
3. 各科履修科目の教員を選択する際には、どのような指針を基に、どのような手続きで決定されているか？教員の選択方法は、どうやって決められるか？選択方法は、1)ゴールや目標、2)適正な芸術的・知的環境の維持、3)音楽ユニットの規模と、どのような関係にあるのか？
4. 学部教員は、どの程度学生のロール・モデルとなることが期待されているのか？このロール・モデルというのは、学生の芸術的・知的な成長過程において、どんな役割を果たすものであるのか？
5. 教員の大学内／外での活動は、どのように奨励されているのか？
6. どの程度、教員は、学生の創造的・知的活動をサポートする必要があるのか？特に、学生の興味が、教員のそれと大きく異なっている場合。
7. 教員の授業数はどうやって決められるのか？教員の就労時間の枠組みは、どのようになっているのか？こうした枠組は、学部のカリキュラムのゴールや目標、芸術的・知的環境整備に、どの程度貢献しているのか？

8. 大学は、どの程度効率的に、教員に対するアシスタント（ティーチング・アシスタントやチューターなど）を配属しているか？
9. 大学や音楽ユニットは、「リーダーシップ」をどう定義しているのか？この定義は、各科のゴールや目標、芸術的・知的環境、プログラムの規模と、どう関係しているのか？学部教員は、その分野の専門家として、どの程度、個人として、あるいは、グループとして、1)地区、2)地方、3)国内、4)世界での「リーダーシップ」を発揮することが期待されるのか？このリーダーシップは、雇用、昇進、終身雇用とどう関係してくるのか？
10. どんな規約が、昇進や終身的地位の確保と関わっているのか？こうした規約は、どの程度、大学運営の具体的なゴール、リソース、コンテキストと関わっているのか？
11. 大学の教員評価システムは、教員の1)作曲や演奏、2)研究、3)教育に関して、どのぐらい効果的であるか？

F. 図書館

1. 大学と図書館全体の特色は何か？この特色は、学部カリキュラムのゴールや目標、また、学部教員や学生のニーズとどう関わっているか？
2. 音楽や音楽に関連する領域の所蔵文献は、学部のゴールや目標、芸術的・知的環境、プログラムの規模、学部学生の個別指導と、どう関連しているか？
3. 現行のシステム運用には、どんな機構や個人が関わっているか？このシステム（未所蔵の文献取得や管理を含む）は、学部カリキュラムをサポートするコレクションづくりに効果的であるか？
4. 図書館の施設やサービスは、学生や教員のニーズに応じているか？これらは、学習環境を十分サポートしているか？
5. 学部のカリキュラムは、どの程度、図書館のリソースと関連しているか？各科カリキュラムは、どんな学問的／演奏に関する傾向があるか？それと、図書館の所蔵物はどう関連しているか？
6. 図書館は、教員や学生が力を入れている領域の文献を、今後所蔵していこうとしているか？もしそうでなければ、どうしたら、こうしたニーズは達成されるか？近隣の図書館との連携はうまく取れているか？

G. 施設と備品

1. 学部教育のための施設は、どの程度、芸術的・知的環境づくりに貢献しているか？
2. 学部の規模に十分な施設であるか？
3. 執行・運営機関が行う施設整備や備品購入に関して、学部音楽教員は、どのように関与することができるか？

4. 施設のニーズを評価するための、継続的なシステムが確立されているか？ 備品の手入れ、修理、購入は、どれほど効率的であるか？

H. 資金

1. 現行の資金運用と、1)学部の使命、ゴール、目標、2)芸術的・知的環境、3)プログラムの規模との関係は？ 長期計画との関係は？
2. 現行の資金運用は、学部のプログラムを継続して運営していくのに、あるいは、今後、拡張／縮小していくという計画に、合致しているか？
3. 資金運用はどのように決定されているか？ 例えば、学部プログラムの運用資金は、授業料が主体か？ 他の財源があるか？ 学部プログラムは、そういった資金を効率的に運用しているか？
4. 学部プログラム内での資金分配は、効果的に行われているか？

第3部：アカデミックな原則とポリシー

学部カリキュラムを編成する際には、音楽の専門教育と一般教養という二つの支柱について考えなければならない。大学によっては、専門家養成教育的要素が強いところもあるかもしれない。しかし、いずれの場合でも、大学や学部は、各履修科目のゴールや目標、そして、学部教育における芸術的・知的環境のあり方を明確に示さなければならない。さまざまな要素が履修科目に影響を与えるには言うに及ばず、カリキュラム全体の発展にも深く関わってくる。本項では、評価を行う際に重要な要素を、以下に列挙する。

A. 演奏

1. 演奏教育の主要なゴールは何か？ 1)専門学生の場合、2)副科学生の場合。
2. 演奏に期待されることがらは何か？ 1)全専攻共通、2)各専攻別。
3. 演奏能力を高めることは、音楽家としての全体的資質向上や、演奏以外の能力向上にどの程度寄与するのか？
4. 上記1.及び2.は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）にどう関わっているか？
5. 演奏の評価方法は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）の指針と、どの程度一貫性を確保しているか？
6. 大学は、学部プログラムにおける演奏分野の将来像を、どの程度明確に提示しているか？

B. 音楽分析

1. 音楽分析の主要なゴールは何か？ 1)学部全体、2)各専攻別。

2. 音楽分析に期待されることがらは何か？ 1)全専攻共通、 2)各専攻別。
3. 音楽分析能力を高めることは、音楽家としての全体的資質向上や、音楽分析以外の能力向上にどの程度寄与するのか？
4. 上記1.及び2.は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）にどう関わっているか？
5. 音楽分析に関わるさまざまな評価方法は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）の指針と、どの程度一貫性を確保しているか？
6. 大学は、学部プログラムにおける音楽分析の将来像を、どの程度明確に提示しているか？

C. 作曲と即興

1. 作曲や即興の主要なゴールは何か？ 1)学部全体、 2)各専攻別。
2. 作曲や即興に期待されることがらは何か？ 1)全専攻共通、 2)各専攻別。
3. 作曲や即興能力を高めることは、音楽家としての全体的資質向上や、作曲や即興以外の能力向上にどの程度寄与するのか？
4. 上記1.及び2.は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）にどう関わっているか？
5. 作曲や即興に関わるさまざまな評価方法は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）の指針と、どの程度一貫性を確保しているか？
6. 大学は、学部プログラムにおける作曲や演奏の将来像を、どの程度明確に提示しているか？

D. 音楽史とレパートリー

1. 音楽史やレパートリーに精通することの主要なゴールは何か？ 1)学部全体、 2)各専攻別。
2. 音楽史やレパートリーを勉強する際に、期待されることがらは何か？ 1)全専攻共通、2)各専攻別。
3. 音楽史やレパートリーに精通することは、音楽家としての全体的資質向上や、音楽史やレパートリー関連領域における能力向上、異文化や歴史理解を深めることにどの程度寄与するのか？
4. 上記1.及び2.は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）にどう関わっているか？
5. 音楽史やレパートリーに関わるさまざまな評価方法は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）の指針と、どの程度一貫性を確保しているか？
6. 大学は、学部プログラムにおける音楽史やレパートリー教育の将来的位置づけを、どの

程度明確に提示しているか？

E. 一般教養

1. 一般教養教育の主要なゴールは何か？ 1)学部全体、 2)各専攻別。プログラムは、どの程度、以下に関する学生の能力向上について明言しているか？ 1)コミュニケーション(言語表現・運用)能力、 2)数学、歴史、芸術に関する分析力、 3)異文化や歴史についての理解、 4)道徳的・倫理的問題についての理解、 5)論理思考力。
2. 一般教養科目に期待されることからは何か？ 1)全専攻共通、 2)各専攻別。
3. 上記1.及び2.は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり(学部全体、各専攻別)にどう関わっているか？
4. 一般教養を学ぶことは、音楽の理解を深めることにどの程度寄与するか？
5. 一般教養科目に関わるさまざまな評価方法は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり(学部全体、各専攻別)の指針と、どの程度一貫性を確保しているか？
6. 大学は、学部プログラムにおける一般教養教育の将来的位置づけを、どの程度明確に提示しているか？

F. 関連専門科目

(音楽教育、音楽療法、音楽ビジネス、音楽工学など)

1. 関連専門科目の主要なゴールは何か？ 1)学部全体、 2)各専攻別。
2. 関連専門科目を学ぶことは、音楽家としての全体的資質向上や、関連領域における能力向上にどの程度寄与するのか？
3. 上記1.及び2.は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり(学部全体、各専攻別)にどう関わっているか？
4. 関連専門科目に関わるさまざまな評価方法は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり(学部全体、各専攻別)の指針と、どの程度一貫性を確保しているか？
5. 大学は、学部プログラムにおけるこれら関連専門科目の将来的位置づけを、どの程度明確に提示しているか？

G. コンピューター

1. コンピューター学習の主要なゴールは何か？ 1)学部全体、 2)各専攻別。
2. コンピューター学習に期待されることからは何か？ 1)全専攻共通、 2)各専攻別。
3. コンピューター使用能力を高めることは、音楽家としての全体的資質向上や、コンピューター関連の能力向上、手段とゴールの相違に対する理解を深めることにどの程度寄与するのか？

4. 上記1.及び2.で示されたコンピューターでのアプローチは、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり(学部全体、各専攻別)にどう関わっているか?
5. コンピューター学習に関わるさまざまな評価方法は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり(学部全体、各専攻別)の指針と、どの程度一貫性を確保しているか?
6. 大学は、学部プログラムにおけるコンピューター学習の将来像を、どの程度明確に提示しているか?

H. 学際的・多文化的学習

1. 音楽と他の分野との関係を学ぶ機会は与えられているか?
2. 音楽における多文化的、超文化的、相互文化的側面について学ぶ機会は与えられているか?
3. 学生は、どの程度、これらの機会に参加することが義務づけられて、あるいは、奨励されているか?

J. 教える準備

音楽学部の卒業生は、何らかの形で音楽教育に携わることが多い。したがって、学部カリキュラムには、音楽を教える準備ができるような機会を設けるべきである。

1. 学部プログラム全体、または、各専門科目は、教えるスキルを身につけることに関して、ゴールや目標を明確に示しているか?
2. 教える準備に関わることがらは、芸術的・知的環境づくりとどう関係しているか?
3. もし教育実習があるのなら、それはどれほど効果的に学生に役立っているのか?
4. 教えるスキルは、教員が学生を教育する際に、どの程度、伝えられているか?
5. 学部学生は、どの程度、他の学部生を教える機会があるか?例えば、コースワーク、セミナー、アンサンブル、個別学習において、教える機会はあるか?これらの機会は、どの程度、監督(指導)されているか?
6. 4年生は、どの程度、自分の専門領域を教える能力が身についているか?

K. 統合——音楽

1. 1)音楽学部学生にとって、2)各専門科目の学生にとって、音楽のさまざまな学習を統合する主要ゴールは何か?
2. 1)専門とは関係なく、音楽学部学生にとって、2)各専門科目の学生にとって、音楽のさまざまな学習を統合することで、期待されていることは何か?
3. 音楽のさまざまな学習を統合するというアプローチは、音楽家としての全体的資質向上や、音楽関連の能力向上にどの程度寄与するのか?

4. 上記1.及び2.で示されたコンピューターでのアプローチは、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）にどう関わっているか？
5. 音楽のさまざまな学習を統合することに関わるさまざまな評価方法は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）の指針と、どの程度一貫性を確保しているか？
6. 大学は、学部プログラムの将来像において、音楽のさまざまな学習を統合することを、どの程度明確に提示しているか？
7. 学部音楽プログラムでの、演奏、音楽分析、作曲と即興、音楽史とレパートリー、一般教養、専門科目、コンピューターへのアプローチは、どの程度、音楽の文化的・知的理解を促すのに必要な能力を、学生に身につけさせているか？

L. 統合——一般教養と音楽教育

1. 1)音楽学部学生にとって、2)各専門科目の学生にとって、一般教養と音楽教育を統合する主要ゴールは何か？
2. 1)専門とは関係なく、音楽学部学生にとって、2)各専門科目の学生にとって、一般教養と音楽教育を統合することで、期待されていることは何か？
3. 一般教養と音楽教育を統合するというアプローチは、音楽家としての全体的資質向上や、音楽関連の能力向上にどの程度寄与するのか？
4. 上記1.及び2.で示されたコンピューターでのアプローチは、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）にどう関わっているか？
5. 一般教養と音楽教育を統合することに関わるさまざまな評価方法は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）の指針と、どの程度一貫性を確保しているか？
6. 大学は、学部プログラムの将来像において、一般教養と音楽教育を統合することを、どの程度明確に提示しているか？

第4部：学部プログラムの入試と履修

これまで、ゴール、リソース、コンテキスト、アカデミック・ポリシーといった要素について考えてきた。第5番目の要素として、学部学生がかかわっているアカデミック・プログラムがある。

学部における入試と履修は、各々に関して、また、相互関係についても、次の5つの観点から検証されるべきである。

また、学部教育というのは、個々の学生の能力やゴールに応じて焦点を定めるべきであることも忘れてはいけない。専門の学生には、そうでない学生よりも、入試と履修は厳格に、

また思慮深く運用されるべきである。

A. 入試

(略)

B. 履修相談

1. 履修相談プログラムは、どんなしくみになっているか？規模は、範囲は、協力的か？
2. 履修登録を行う際に、履修相談プログラムはどのように機能しているか？
3. 履修相談プログラムは、専攻科目の実習とどう関わっているか？卒業後の進路について、どの程度の準備を行っているか？
4. 履修相談プログラムは、1)定期的な学生の能力評価や、2)各履修科目の教育目標達成と、どのように関わっているか？

C. 休学・退学

(略)

D. 卒業要件科目

1. 卒業要件科目は、目標、リソース、コンテキスト、芸術的・知的環境とどう関わっているか？
2. 卒業要件科目は、どの程度、卒業生の将来（職業、演奏／作曲、抽象的なレベル）と関係しているか？
3. 卒業要件科目は、どの程度、1)各学生の演奏や研究における独創性を奨励しているか、2)指導を受けなくても、専門家として一人立ちできるように配慮されているか？
4. 卒業要件科目は、どの程度、学生の専攻科目、専門の授業、音楽の一般的知識、芸術や文化についての一般的知識、科学や人文科学における一般的知識を配慮しているか？

E. 寮制度

(略)

F. 外国語や他の音楽外知識やスキル

1. どんな外国語、リサーチ、音楽外的知識やスキルが、各学部カリキュラムで履修されているか？それぞれは、どの程度のスキルを要求しているか？こうした科目は、学部カリキュラム全体とどう関係しているか？
2. これらは、必修か？選択の場合、どんな基準が用いられているか？

3. これらのスキルは、最終プロジェクトとどう関係しているか？他の履修科目とどう関係しているか？

G. 授業科目

1. 大学の各学部カリキュラムで履修が義務づけられている科目の規模や、履修の順序はどうか？これらは、各カリキュラムの掲げる目標とどう関連しているか？
2. 専攻分野に必要な能力を身につけることと、科目の履修はどう関連しているか？もしそうした能力が科目の履修によって得られないのだとしたら、これらの能力をつけるためには、どうしたらよいか？
3. 初級レベルと上級レベルでは、科目のスタイル、アプローチ、哲学において、どういう違いがあるか？
4. 科目の履修は、卒業試験や大学院の入試とどの程度関係しているか？科目では、学生が卒業後、仕事につきはじめる頃に遭遇する状況に対応できるよう準備をさせているか？
5. 各学部カリキュラムの科目の内容は、音楽学部の規模とどう関係しているか？
6. 科目の内容は、芸術的・知的能力の統合という目標とどう関連しているか？
7. 音楽ユニット、あるいは、大学全体が、科目における相互関連についてどの程度の目標を設定しているか？
8. 他の大学で取得した単位の移行をどう取り扱っているか？短大からと四年生大学からとでは、違ったポリシーがあるか？

H. インディペンデント・スタディ

〔訳注：実習形式の授業。学生と教員が話し合いによって、授業内容を決定し、それに従って実施する。〕

1. インディペンデント・スタディの主要な目的は何か？ 1) 全学生共通、 2) 各専攻別。
2. インディペンデント・スタディに期待されることからは何か？ 1) 全専攻共通、 2) 各専攻別。
3. インディペンデント・スタディで培うアプローチは、音楽家としての全体的資質向上にどの程度寄与するのか？
4. 上記 1. 及び 2. で示されたインディペンデント・スタディでのアプローチは、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）にどう関わっているか？
5. インディペンデント・スタディに関わるさまざまな評価方法は、学部のゴールや目標、学部の芸術的・知的環境づくり（学部全体、各専攻別）の指針と、どの程度一貫性を確保しているか？
6. 大学は、学部プログラムにおけるインディペンデント・スタディの将来像を、どの程度

明確に提示しているか？

J. ファイナル・プロジェクト

ファイナル・プロジェクトは、通常、専門領域における修得度を示すために設けられている。ファイナル・プロジェクトには、演奏、作曲、論文、論文発表などが含まれる。ここには挙げられていないようなファイナル・プロジェクトを課している大学もあるだろうし、大学のカリキュラムによっては、ファイナル・プロジェクトを設ける必要のないところもあるだろう。

1. 過去五年間に大学で行われたファイナル・プロジェクトのリストを作成せよ。これらの内容が、学部の音楽プログラムをどう反映しているか？
2. ファイナル・プロジェクトの内容は、学部音楽プログラムや各専攻カリキュラムの使命、ゴール、目標を達成しているか？
3. ファイナル・プロジェクトは、どの程度指導されるもので、どの程度自力で行うものなのか？
4. ファイナル・プロジェクトのトピックはどうやって選ばれているか？これらは、1)学生の知的・芸術的能力の向上、2)専門領域における能力の向上、3)教える準備、4)音楽分野における他の仕事を行う準備とどう関連しているか？
5. 卒業認定において、ファイナル・プロジェクトはどの程度の比重を占めるか？

K. 成績評価

1. 各学部プログラムにおける成績評価に関する、大学としての哲学とは何か？この哲学は、学部プログラム全体や各専攻ごとの使命やゴールと、どう関わっているか？
2. この哲学は、どの程度、評価の内容、時期、方法について明言しているか？
3. 何を成績評価するか？この内容は、各学部カリキュラムのゴールや目標とどう関連しているか？また、入試、休学・退学、履修指導などとどう関連しているか？
4. 成績評価のシステムは、学部音楽プログラムが望む芸術的・知的環境の整備に、どれほど寄与しているか？
5. 成績評価のポリシーは、学生個人のスキルや創造的アプローチの向上を、どう奨励しているか？成績表は、どの程度、各学生が芸術家として、演奏家として、教師として、研究者として自立していく過程を示しているか？
6. 複数のコースワークを通じて、また、それ以外の体験から学生が培った知識やスキルの総体を、どの程度成績評価しているか？
7. 成績評価システムは、学生の総合的知識やスキルの向上を、学部プログラムや各専攻分野での目標との関係においてどう評価しているか？

付録3 NASMの音楽分野における教育についての姿勢

「16. 才能、教育、就労の間にはどんな関係があるか？」^{*}

芸術系学部にいる学生は、親や友人や先生から、才能に恵まれていると思われていることが多い。才能とは何なのか？そして、この才能は、本人の将来とどのような関係にあるのだろうか？以下では、才能と、大学での教育と、芸術分野（美術、デザイン、舞踊、音楽、演劇など）での仕事との相関関係について考えてみたい。[以下、項目のみ列挙。各項についての解説は省略。]

- ・一般に才能とは何か？
- ・芸術分野における才能とは何か？
- ・才能があるということは、その人の生涯や仕事に関してどういう意味をもつか？
- ・才能を職業的能力に変えるものは何か？
- ・才能に恵まれていれば、その人は成功をおさめ、偉大になれるのか？
- ・芸術はどのようにして職業となりうるのか？
- ・自分が、ある芸術分野に必要な才能を持ち合わせているかどうかは、どうやって知ることができるか？学習体験によって、それはわかるのか？
- ・自分が「有名になる」可能性はあるか？
- ・教育を受けるとどうなるのか？
- ・自分にはいくつかの才能があるので、何を専攻したらよいかかわからない。どうやって決めたらいいのか？
- ・芸術を専攻した場合、そこで学んだことは芸術以外のことにも使えるか？
- ・もし芸術を専門としたくなくなったとしても、大学を卒業することはできるか？

注

- i <http://www.hero.ac.uk/rae/>及び、<http://www.rae.ac.uk/>
- ii <http://www.qaa.ac.uk/>
- iii <http://www.qaa.ac.uk/academicinfrastructure/benchmark/honours/music.asp>
- iv 日本私立大学協会附置私学高等教育研究所「アメリカにおける大学評価の新段階-アクレディテーションの本質と日本の評価体制」～第11回公開研究会から～(<http://www.riihe.jp/series/series12.html>)。
- v Charles M. Cook, “American Accreditation: Its Process and Spirit.” (前注ページよりダウンロード可)
- vi <http://nasm.arts-accredit.org/index.jsp>
- vii http://195.194.167.103/Pubs/5_99/ByUoA/crit67.htm

- viii National Association of Schools of Music, *The Assessment of Undergraduate Programs in Music* (1991, 1996).
- ix National Association of Schools of Music, *2003-2004 Handbook* (2003).
- x 「16. 才能、教育、就労の間にはどんな関係があるか？」 <http://nasm.arts-accredit.org/index.jsp?page=FAQ%2016>

The University Evaluation of Music: What is Learned from the Cases of the UK and the USA

WATANABE Kenji, NAKAMURA Mia

With the 2002 revision of the School Education Law and the change of the national universities into independent administrative entities, the university evaluation has become a more important issue. In order for universities to meet social requirements and achieve an efficient fund management, the Japan University Accreditation Association and the National Institution for Academic Degrees and University Evaluation have led the university evaluation in Japan.

However, since their criteria are designed mainly for research universities of science and technology, they do not effectively work for evaluating universities of music, in which musical creation as well as performance are important activities. Given the fact that the evaluation functions not only as assessing a current system but also determining a future picture of the school, it is an urgent task to set up evaluation criteria in music. In fact, the two organizations are asking our university to draft a model of such criteria. Our proposal is much being hoped.

Our university thus added “A Study of Evaluation in Music” to the current mid-term project. In 2004–2005, particularly, an investigation was conducted regarding university evaluation methods of music in the United Kingdom and the United States of America.

The present article is a report of the investigation. Given an overview of university evaluation, section 1 defines what are the process, subject, and object of our evaluation. Section 2 discusses the British case in which the university evaluation based on a nation-wide system determines the amount of research grant of each school. Section 3 examines the accreditation system in the US. Finally, section 4 points out that the US method would work better in the current Japanese situation, and suggests additional concerns in adopting the method. For the next step, the study calls for a workshop or symposium among Japanese universities of music.